

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第三十五卷 第五號

昭和七年十一月一日發行

論 叢

多收手段としての酒税……………法學博士 神戸 正雄
笠間藩の民政……………經濟學博士 本庄 榮治郎
安定期經濟學と變革期經濟學……………經濟學博士 石川 興二
ロングフィールドの價值論と分配論……………經濟學博士 堀 經夫

研 究

我國の市町村義務費に就いて……………經濟學士 小山田 小七
金爲替準備への再吟味……………經濟學士 松岡 孝兒
證券資本主義^{時代に於ける}資本の構造……………經濟學士 石田 興平
カルテル法への要望……………經濟學士 磯部 喜一

說 苑

貨幣の價值に就いて……………文學博士 高田 保馬
人口動態並行法則を論ず……………經濟學士 三谷 道麿
爲替相場の變動に就て……………法學士 正井 敬次

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁 轉 載）

ロングフィールドの價值論と分配論（下）

堀 經 夫

六 勞賃論 先きにも述べたやうに、ロングフィールドは『所得の源の正しき分析がなされ得る唯一の順序は、第一地代、第二利潤、第三勞賃なること』を示さうとした。而して地代が第一に考察されたのは、それが價值——限界生産費——の外に出づるものと看做されたからであり、次に價值の中から利潤が先づ控除されたのは、自由競争が完全に行はれて居る限り、利潤の大きさは資本の限界生産力によつて一定の率に定まるものと看做されたからである。かくて彼にあつては、價值の中から既定の利潤が控除された後に殘留するものとして、最後に勞賃が考慮されたのである。

かかる考へ方は、既に明かなる如く、リカアドウ流の考へ方と異つて居る。リカアドウ學派の人々は價值の中から、先づ勞賃——それは、丁度ロングフィールドにとつて利潤が理論的に勞賃よりも先きに確定され得る所得であつたやうに、彼等にとつては其の生存費説よりして利潤よりも先きに確定され得る所得であつたのである——を控除し、其後に殘留するものとして利潤を考察したのである。リカアドウの流を汲むマルクスが剩餘價值の學説を唱へたることを觀ても、こ

のことは明かである。

以上の當然の結果として、ロングフィールドが勞賃に關する生存費説を排斥したることは、豫め推測され得る點であり、又事實である。彼曰く、

勞賃について次のやうな學説が通行はれて居る。即ち、『勞働の價值は、他の有らゆる品物と同じく、生産費に依存する。而して一勞働者の生産費とは、彼れの自然的又は人爲的諸慾望に應じて、その勞働者並びに普通は家族——家族は、その國の人口を保持し、且つその國民が増加人口を要求するか或は靜止人口を要求するかに従つて、人口を調節し得るために、必要なるものである——を支持するに十分なるその額を指す、』といふのである。吾々は或る貨物の價值が生産費によつて定まることを知つて居る。『併し類推によつてこの眞理を證明し、而して普通勞働者の生産費の何たるかを發見しようとする試みは、勞賃といふが如き重大問題にとつては、無駄であるやうである。……「生産費」といふ言葉は、かかる場合に適用された時には、單に比喩的のものにすぎない。』『勞働者の勞賃は彼れの生活費及び通常の生活方法に依存するのであつて、彼れの生活費及び生活方法が大なる程度に彼れの勞賃に依存するのではない、』との議論は、論理的にも亦事實問題としても誤つて居る。勞賃が減少しても、勞働者はただ慰樂品の一部を犠牲にするに止まる場合があり得ることを考へれば、生存費説の誤れることは明かであらう。

かくの如く生存費説に反對したる彼は、勞賃について次のやうな説明を加へた。即ち、

『勞働者の眞實勞賃、即ち生活の必要品及び慰樂品に對する彼れの支配力は、全く利潤率及びそれに勞賃が通常支出されるその品物を生産する勞働能率に依存するであらう。』

『勞働の勞賃は、利潤率及びそれに勞賃が支出されるその貨物の製造に使用される勞働の生産力に依存する。』

『私が主張せんとする總ては、勞働者の勞賃は彼れの勞働の價值(生産力又は生産能率の意——堀註)によつて定まるのであつて、彼れの自然的又は後天的諸慾望によつて定まるのではないといふことである。』

これ等の章句の中には、少くとも三つの意見が含まれて居るやうに思はれる。第一は、勞賃は利潤率に依存する、といふ意見、第二は、眞實勞賃は勞働者の消費する貨物の生産に於ける勞働

1) Cf. Longfield, *ibid.* pp. 202—205.
2) *Ibid.* p. 212.
3) *Ibid.* p. 215.
4) *Ibid.* p. 206.

の能率に依存する、といふ意見、第三は、勞賃は一般的に勞働の能率に依存する、といふ意見である。第一は謂はば勞賃に關する剩餘價值説であり、第二は眞實勞賃に關する生産力説であり、第三は一般勞賃に關する生産力説である。この中重要なのは、言ふまでもなく、第一説と第三説とであるが、前者は勞賃の本質を論じ、後者は勞賃の大きさを論じたものと、いふことが出来るであらう。彼はこれ等兩説の内容を次のやうな假設的數字を用ひて解説して居る。即ち、

『今假りに、一人の勞働者が、一年間、地代を生まない劣等地の耕作に従事して、(或は一層正確にいへば、)一人の勞働者が、其の價格の中に地代が構成要素として入り込まない所のその穀物の生産に従事して、四四クワオタアを産出し得るとせよ。然らば、利潤を一割とすれば、彼れの勞賃は四〇クワオタアでなければならぬ。』⁵⁾

『若しも利潤率が一割であり、各人の勞働が相等しき價值を有し、而して各貨物の生産より平均一年の間隔を置いて雇傭されるものとするならば、各貨物の價格の中、六は資本金に歸し、残りの四は勞働者達の間に、各人が其の製造に對して貢獻したる勞働の分量に比例して、分割されなければならない。而して貨物の價格は其の生産に使用せられた勞働の分量に比例すべく、勞働者の勞賃は勞働の生産力に依存するであらう。即ち勞働者がより多くを生産するに應じて、彼等はより多くを受領するであらう。』⁶⁾勿論、實際に於ては、各人の勞働の價值は相等しからず、又生産と販賣との時間は不同であるが、併し上述の原理はそれによつて少しも害はれない。⁷⁾

以上の例解の中には、利潤(又は利子)に關する打歩説又は時差説が織り込まれてゐるから、彼自身の勞働價值説より考へてやや不可解な點が含まれて居るけれども、尙ほ彼が利潤(又は利子)をでなくて勞賃を剩餘價值に該當するものと看做したること、及び勞賃の多少を勞働の生産力の大小に依存せしめたることは、略ぼ明瞭であらう。

七 三所得間の關係 勞働價值説に出發し乍ら、リカアドウなどとは違つて、上述の如く地代

5) Ibid. pp. 212—213.

6) Ibid. p. 214.

7) Cf. ibid. pp. 214—216.

——利潤——勞賃の順序で所得の分配を論述し、其の間に利潤(又は利子)に關する打歩説又は時差説や限界生産力説を、或は勞賃に關する剩餘價值説や生産力説を——假ひ完全なる理論的統一に於てではなくとも——創唱したるロングフィールドは、最終の講義(第十一講)の中に於て、これ等三所得或はこれ等をそれぞれ受領する三階級の間の關係を論じた。彼は先づ三階級の利害關係相反論にしてリカアドウなどの唱へたるものを要約したる後に、これを全般的に反駁して曰く、

『併し事實上三階級の利害は相反しない。各契約の當事者達は、正に契約を結ばうとする時には、互に相反する利害關係を有つて居る。蓋し各々は出来るだけ多く取得し、出来るだけ少し與へやうと欲して居るから。併し他人の競争があるために、この相反する利害關係が孰れか一方の損害を結果するやうに作用することは、妨げられるのである。而して契約締結以前に於ては、總ての當事者は、交換の目的物たる諸貨物が最上の又は最廉の方法で生産されるべきことについて、共通の利害關係を有つて居るのである。』⁸⁾

かかる漠然たる議論に對しては、吾々は未だ理論的にそれが正しいか否かの判斷を下し難い。そこで吾々は一步を進めて、先づ地代¹⁾と他の二所得との關係についての彼れの所説を觀ることとする。其の大意は次の如くである。即ち、

一所得源としての地代は、土地所有者の側に於て何等努力しなくとも増加し得るものである。即ち地代は『社會の進歩と共に、人口の増加が食物獲得のためにより劣等なる土地に頼ることを必要ならしめるから、自然的に増加する。』勿論農業上の諸改良は反對の結果を生むであらう。『併しこれ等の改良は決して急激に普く採用されるものではない。其の普及は緩慢である。同時に人口が増加する。かくて一の原因が他の原因を相殺するから、穀物の價格は殆んど靜止し、従つて今や一層豐富なる生産物を一層低廉に産出することの出来る優等地は、より高き地代を産むことが出来、社會は其の生活資料のためにより高き價格を支拂はされることなきにも拘らず、地主の所得は増加される。』之を要するに、地代は、社會の進歩と共に、

8) Ibid. p. 223.

假ひ農業上の諸改良あるも、益々増加の傾向を有し、而も土地の分量は一定して居るから、個々の地主は愈々有利なる地位に置かれることとなる⁹⁾。

然らばこの地主階級に對する資本家及び勞働者の階級の境遇は如何であらうか？ 惟ふに、社會の進歩と共に、資本及び勞働の分量は土地と異つて益々増加する。故に、假ひ利潤及び勞賃の總額は増加するも『一定の資本に對する利潤及び一人の勞働者の勞賃は減少するであらう。』これは眞理である。『併し、事物の自然の進行が人爲的諸制度によつて妨げられざる限り、地主の數は亦増加の傾向にあるのである。それ故に、同一量の土地がより多數の所有者に分配されるであらうから、各階級間の相對的境遇は以前と同様たるべく、つまり、より大なる人數が土地の地代によつて、より大なる人數が資本の利潤によつて、而してより大なる人數が彼等の勞働の勞賃によつて支持せられることになるのである。』¹⁰⁾

即ちロングフィールドは、他の二所得に比して地代の増進が社會の進歩と共に一層著しいことを認めたが、併し地主の數が増加する——即ち多數の小地主の出現を見る——から、個々の地主の所得はさほど増加しない、と主張して、資本家や勞働者に對する地主の特典と、三所得間の均衡の破壊とを、否定しようとしたのである。

次に吾々は利潤と勞賃との關係についての彼れの所説を観るであらう。其の大意は次の如くである。即ち、

『利潤と勞賃とは地代よりも一層重要な富の源である。これ等のものは地代と異つて生産に刺戟を與へる。故に一方が他方を侵害せざる限り、兩者共に出来るだけ高いことが望ましい。』先づ利潤率について考へんに、今假りに一〇〇名の勞働によつて生産された機械が『一年間に一〇名の附加的勞働によつて生産されるであらう所のものに相當する收益を生産する、』とするならば、利潤率は一割でなければならぬ。而してこの利潤率は、其の低下を妨げる諸事情あるにも拘らず、資本の増加と共に益々低下する傾向をもつて居る。而もこの傾向は、(一)資本家の所得の低減、(二)資本蓄積の困難、(三)資本の外國逃避といふが如き弊害を伴ふと共に、他方資本の現在價值と將來價值との差を僅少ならしむることによつて、資本の永續的投

9) Cf. *ibid.* p. 224.

10) *Ibid.* p. 225.

下を可能とする、といふ大なる利益を齎らすのである。¹¹⁾

次は勞賃であるが、勞賃は利潤率に反比例するから、利潤率の低下と共に増加の傾向を辿るものといはなければならない。ただ、『同一分量の穀物を生産するのにより多くの勞働が必要となるから、同一分量の勞賃は以前と同量の穀物を購買し得ない。』との、眞實勞賃の減少に關する重要な問題が、尙ほ考慮さるべきである。併し、この減少は農業上の諸改良によつて緩和されると共に、又製造業に於ける分業の進歩及び機械の採用——其の結果として、勞働者は食物等の購入に當つて蒙る損失を製造品の購入に際して償ひ得るばかりでなく、なほ大なる餘裕を有つに至る——によつて却つて増補せられる、といふことを考へれば、『事物の自然の進行と共に、人口の増加が、それに隨伴する總ての結果を以てしても、勞働者にとつて不利益にならうとは、思はれない。』之を要するに、『若しも生命と財産とが確保されて居るならば、利潤率は減少し、勞働は一層生産的となり、而して各人の勞働の相對價值は増加するであらう。』といふのが、最も自然的なる成行である。¹²⁾

即ち彼は、一定の價值の中から分配さるべき二つの所得、即ち利潤と勞賃とについて、前者の減少及び後者の増加の傾向を説き、この傾向を以て最も自然的なるものと解したのである。

最後に、地代、利潤、及び勞賃の相互關係に關する以上のロングフィールドの學說を顧るに、それは結論に於てリカアドウなどの學說と相隔る甚だ遠きものゝ如く見える。即ちそれは非常に樂觀的な結論を以て終つてゐる。併し乍ら仔細に觀察すれば、彼れの議論の本質はリカアドウなどのそれと著しき懸隔なきことを看取し得るであらう。何故なれば、彼は、(一)地代又は地主階級に關してはリカアドウなどと殆ど逕庭なき議論をなし、ただ纔かに小地主の増加といふ一事を以て地主階級と他の二階級との利害の相反——これは彼れの認むる所である——を扮飾せんとしたるに止まり、(二)利潤と勞賃若しくは資本家階級と勞働者階級との關係については、其の利害關係の調和を積極的に主張することなく、ただ社會の進歩と共に勞賃が増加することを説いて、リカ

11) Cf. *ibid.* pp. 227-235.
12) Cf. *ibid.* pp. 235-239.

アドウなどの學說を根本的に否定し得たるものと自認したるにすぎないからである。要するに、彼は其の三階級利害調和論に成功したとは必ずしも言ひ得ないのである。

かくてロングフィールドは、其の『講義』の中に於て、『附録』（註を集めたもの）以外の個所ではリカアドウに殆ど言及しなかつたにも拘らず、彼れの學說の影響を受けること最も大であつた、と言ひ得るであらう。而も彼は、價格の決定について限界需要の學說を論じ、利潤（又は利子）について打歩說又は時差說や限界生産力說を唱へ、従つて分配を論ずるに當つては勞賃よりも利潤を先きに取扱はなければならぬとなし、又勞賃については生産力說を説きたるなど、經濟學說史に對する貢獻は頗る多く、この點に於てはリカアドウを遙かに凌いで居る。

而して吾々の興味は、リカアドウ流の學說とこれ等の新學說とが、ロングフィールドにあつて如何に按排せられ綜合せられたか、の點に懸つて居る。私は彼れの學說の紹介に當つて特にこの點に留意した積りである。然るに、私の最上の善意的解釋にも拘らず、彼れの體系中では、既に述べた如く、諸々の學說が未だ完全に融合してゐないやうに思はれる。一見異つた諸學說を集大成して一段と進歩せる新經濟學體系を創設すること、——若しこれが吾々の任務の一つであるとするならば、その仕事はロングフィールドなどの學說の研究及び批判から始められなければならないのではなからうか？

（附記）セリグマンによれば、ロングフィールドの學說は、彼れの後任としてダブリン大學の經濟學教授となつたアイザク・ベット（Isaac Butt, 1813-1879）によつて、更に發展せしめられたとのことである。¹³⁾

13) Cf. Seligman, *ibid.* pp. 118-119.